
非日常アリス

リュウカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常アリス

【Nコード】

N7314M

【作者名】

リュウカ

【あらすじ】

なぜか唐突に異世界に召喚されてしまった一人の少女。

「いや、普通的女子高生に世界を救えとか無茶言わないで下さいよ。」

そんな彼女が、異世界で必死に生活しながら元の世界に帰ろうとするお話（になる予定です）。

異世界トリップものです。主人公が物理的に強くなったり、戦闘シーンバリバリだったりはありません。あと、タイトルにアリスとある

けどアリス関係ないです。さらに更新亀です。ご注意ください。
残酷な描写は、あるかもしれない、程度です。

始まりは闇の中

今日は、いつもどおりの一日だった。

朝起きて、学校に行つて、授業を受けて、友達とおしゃべりして。いつもどおりの、普通の一日。ああ、なんて素敵な日だろう。普通万歳。普通最高。普通こそ我が人生。

普通ラブ！と叫ぶと某普通でない人に被つてしまいそうなので言わないが、そう言いたいくらいに私は普通が好きだ。どうして普通がいいと思うようになったのか、と言われると、普通でない事情を話さなくちゃいけないので割愛。どうでもいいっしょ。うん。

家に帰つて、普通だった幸せな今日を振り返りながら自分の部屋に入る。ありふれている普通のセーラー服を脱いで、部屋着に着替える。白地に赤で意味の分からない英語がプリントされたＴシャツの上に淡いピンクのパーカー、黒の短パンは、この間の誕生日に兄から貰ったものだ。兄はセンスがよくて、こういうかわいいけどかわいすぎない、私の好きな服装を熟知してそういったものを買ってくるのだから始末が悪い。貰ったからには着たくなるじゃんか。兄が買つてゐる姿は普通じゃないように思えてあまり想像したくないのに。

「おー、帰つてたのか。お帰り」

リビングでは、兄がソファに座つてテレビを見ていた。膝には我が家のアイドル、アリス（ウサギ。母命名）がいた。ウサギにしては珍しいらしいが、アリスは膝の上が好きなのだ。いや、珍しくない。普通です。というか、可愛いからどうでもいい。うん。”可愛い”は正義”とはよく言つたもんだ。

「アリスーおいでー」

ソファに腰掛けながらアリスに呼びかける。ああ、可愛いなあ……真っ白だけど、耳の先だけちよつと黒いところとかすごく可愛

い。目がくりくりしてて、こつちをみてはち瞬きしてるところとかすごく可愛い。手とかふにふにであつたかくてすごく可愛い。癒されるなあ……

「おーい。お兄さんの言葉は無視かー？」

「ただいま兄」

「紗那^{しやな}、もつとこつ心温まる呼び方をだね」

あー、アリスは可愛いなあ。ラブだなあ。もふもふだなあ。

「無視ですか……」

兄の膝から私の膝に移ってきたアリスにメロメロになっている私の耳に、兄の声は届かない。ちよつと眠そうな感じがまたいい。ちよこんとした尻尾がラブリー。幸せな暖かさが膝からじんわり伝わってくる。ちっちゃいなあ。可愛いなあ。

アリスを撫でながらテレビに目を向ける。夕方のニュースが終わるところだった。この後のドラマは一応チェックしている。女子高生なら普通見ているドラマらしいから。大学生の女性が、同じ大豆製品研究会の仲間の男と、近所の”お兄ちゃん”である社員の男に挟まれてどっちを選ぶか迷う、ありがちな三角関係のドラマ。恋愛がどうなるかは正直どうでもいいが、大豆製品研究会の動向は気になる。前回は大豆製品研究会がライバルである絹豆腐愛好会に勝負を挑まれて、苦戦を強いられているところで終わった。絹豆腐の素晴らしいさを洗脳によって審査員に伝えていた相手に主人公たちがどう立ち向かうのか、今週はかなり興味がある。

ニュースが終わった。森が映る。ミネラルウォーターのCMだ。森かあ。最近行ってないなあ。小さいころ兄に連れられてサバイバル訓練に……いや、森林浴に行ったときのことを思い出す。森、好きなんだよね。普通に行くのであれば。

「あ、そういえば」

唐突に兄が口を開いた。

「紗那。旅行の用意しとけ」

「は？」

いきなり何を言い出すのだこの兄は。どこかに行く予定なんて……ない、よね？多分。ちよつと自信がなくなってきたけど。

「いや、必要になりそうな気がすんだよね。何だかさ」

意味が分からない。

けれど、こういふときの兄の勘は当たる。ものすごく当たる。お母さんがいきなり「マダガスカル行くわよ！」と言って数時間後に連れ去られたときも、兄のおかげで事前準備が出来ていた実績がある。それから、抜き打ちテストも予言してくれる。おかげで赤点を免れたこと幾数回。無視できないんだよね。

「……今回は、どこかな」

「さあ。俺は連れてかれる心配ないけど、お前は確実に連れてかれるだろうから、まあ、頑張れ。お土産楽しみにしてるぞ」

これだから受験生は。

「どうしてお母さんはいつも唐突なのかな。事前に連絡してって言うてるのに」

「まあ、母さんだからな」

それで済んでしまうとところが母の母たる所以だろうか。普通じゃなくて嫌なんだけど。

仕方がない。ドラマは諦めよう。下手したら夜にでも連れて行かれるかもしれない。

「今日、お母さんいつ帰ってくるって？」

「九時過ぎるってさ。夕飯は俺だ」

「夕ご飯何？」

「とんかつだ。ミルフィーユ仕立て」

又の名を貧乏仕立て。しかし安くてうまい。中心にチーズを入れれば、サクツとした衣の中からジュワリと肉汁が染み出し、さらにトロリとチーズが溶け出て最高である。想像したらよだれが出てきた。

「じゃ、ちよつと用意してくる」

「おー。ファイター」
人事だと思つて。人事だけど。

三日分の着替えとパスポート、お風呂道具一式に歯ブラシセット。暇つぶし用の本を一冊、趣味用に彫刻刀も。お金少々。一応ノートと鉛筆。そして忘れちゃいけない調味料一式とサバイバルセット（兄特製）。

下手したらジャングルに連れて行かれる可能性もある。無人島の可能性だつてある。調味料とサバイバルセットはこの旅行を無事終えるために欠かせない存在なのだ。使わないに越したことはないのだけど。確率は半々だもんな……

大体の荷物をつめ終わつたところで、ノックの音がした。

「紗那ー？」

がちやりと兄が部屋のドアを開けた。私は迷わず手元の石鹼をとつて投げた。

「うわっ、いきなりものを投げるな。危ないだろう」

そういつて易々とキャッチしててくせに。

「返事する前にドア開けないでよ」

「おお、悪い悪い」

全然悪いと思つてないな。普通に石鹼返してくるし。むう。

「でさ、お前とんかつ何個食べる？」

「んー……三つ」

今日は割とお腹が空いているので、一個多め。

「了解。じゃー七個だけ揚げて、残りは冷蔵庫に入れておくか」

兄は四個か。さすが育ち盛り。

「あ、兄。今回の旅行先、なんの目星もついてない？」

帰りにかけた兄に声を掛ける。

兄はちよつと難しい顔をして、すぐに首を横に振つた。そりゃそ

うか。お母さんの行動予測なんてする方が無駄だった。でも半袖何枚持っていくか迷うなあ。

「まあ、半々でいいんじゃないか？上着も一枚持って行つとけば何とかなるだろ」

「そだね。それじゃあ……」

とんかつよろしく、と言おうとした。でも、言葉が続かなかった。何の変哲もない普通の部屋の中。ちよつと雑多な感があるけど変なものとはこれといって見当たらない。不思議なことなど起こるはずもない。

なのに、私の体は浮遊感で包まれていた。

な、何これナニコレ！？なんか青白い光が床からビカーッてなってるんですけど！！！！いつの間にこんな仕掛けが私の部屋にできたの！？

「？紗那……って、へ？ど、どうなってんだコレ……？」

あ、兄が呆然としてる珍しい　ってそうじゃない！ちょ、気持ち悪い。逃げよう！

慌てて立ち上がったてその場から離れようとした。とにかく離れなくちゃ！こいつあなんかヤバイ臭いがプンプンするぜ！

てんぱった頭でよく分からないことを考えながら、とにかく立ち上がった。そのとき、

私の足元に、黒い穴がぽっかりと開いた。

「へ？」

浮遊感が増す。支えをなくした私はそのまま穴へと……　ってヤバイ！

近場にあつた荷物満載のトランクに必死でしがみつく。ところがトランクは私を支えるどころか、スピードはそのままに、一緒に穴へと落ちてしまった。

「紗那？紗那っ！おい、どこにいった！？」

兄の焦った声が遠く響く。ああ、兄よ。私は下にいます。

部屋の明かりだろう白い光はぐんぐん小さくなり、あっという間に小さな点になってしまった。あたり一面真っ黒になる。それでも下へ下へと落ちていく私。トランクを胸に抱えたまま、段々上がどつちで下がどつちか分からなくなってくる。何かなにやら分からないけど、よく分からない落ち着きを發揮した私の口から、一言ポロリ。

「このままどつかにでたら、確実に衝撃で死ぬなあ……」

せめてもと、トランクを下にして受身の準備を取る私だった。

始まりは闇の中（後書き）

はじめてみました。連載ものです。

ペースはおせじにも速いとはいえないとおもいますが、完結させるよう心がけます。頑張ります。いえ、やります。

しかし、テンポが悪いwww

いや、人違いですから！

闇に抱かれながら、ふと、昔を思い出していた。

昔。兄に、家から少し離れた所にある小高い山の麓にある、大きな森へ連れて行ってもらった時のこと。

「お兄ちゃん、ここで何するの？」

何でつれられてきたのかもよく分からないまま、私はそう呼びかけた。そういえば昔は「お兄ちゃん」と呼んでいたっけ。こっぴどかしい。

「ちよつとサバイバルを」

「さばーばる？」

そのころは、兄がそ……いうのに嵌りたてだったこともあって、よくわかってなかった。ただ、兄の眼がきらきら輝いていたから、とりあえず何か楽しいことなんだろうな、とだけ思った記憶がある。

お父さんも母さんも出張が重なって、初めての二人で一日以上の留守番だった。兄は前々から計画していたのか、たまたま思い立ったのか、学校が終わった後、私を連れて森へ来たのだ。私はお気に入りハンカチ以外何も持っていなかった。兄はペティナイフと鍋、マッチ、ビニール紐、一冊の本しか持って行かなかった。それで夜ごはん朝ごはん、昼ごはんまでどうにかしようと考えていたらしい。アホだ。

結果を言つと、ものの見事に失敗した。

食べ物が見つからなかったのだ。

兄が持ってきてきた本には食べられる雑草とキノコについて書かれ

ていた。それを元に二人で探すのだが、全然分からない。どれも同じに見えるし、どれも違って見える。おまけに暗くてよく見えなくなってくる。

最初は楽しんでいた私も、一時間もしないうちにつまらなくなってきた。疲れも出てきた。そのとき私はまだ小学三年生だ。無理があったと言うのが正しい。

しかし兄はこんなときだけ諦めが悪い。そして、頑固だ。

結局、帰ろうと言う私の言葉は受理されず、見つけた小さな川のそばで、食べられそうな雑草を少しと小魚を二匹だけ、どうにか起こした火で煮て食べた。雑草は青臭くて噛み切れなくて、全然おいしくなかった。魚も骨が硬くておいしくなくて、お腹が空いていたけど残してしまった。兄は私が残した分も全部食べた。

水を掛けないで火を消して、寝ころがった。地面はじとつとしていて、少し気持ち悪かったけど、それよりも何より、私は木々の間から覗く黒い空に釘付けになった。

キラキラと一面に星。

ちょうど開けていて、空がはつきりと見えるところだった。

いつもはもう少し紺色な空は真っ黒で、いつもは空にポツポツとしかない星はわっさりあった。天の川を初めて見た。流れ星をいっぺんに三つも見た。今まで名前しか知らなかった星座を教えてもらった。土は温かくて、風はひんやりとして、川と草のさらさらとした音や、虫や鳥の遠くで鳴く声が気持ちよかった。私の森の記憶は、黒だけ優しい、心地いい所になった。

よく考えたら野生動物に襲われなかったり、毒虫にかまれたり、毒物を食べたりしなかったのは運がよかったとしか言いようがない。朝には大人しく家に帰った兄もそれは分かったらしく、それ以降、サバイバルの知識を仕入れては「修行」と称して一人で試しに行くようになり、私を連れて行くことはほとんどなかった。私は、安心

すると共に少し寂しさを感じ、夜の森への憧れも捨てきれなかったのだが、一人で夜に出歩くことに抵抗を覚え、ベランダや庭で星を眺める程度だった。

闇に抵抗はなく、むしろ心地いいものとして私を包んでくれる。
しかしさすがに……

「いきなりはひどくない？」

そうつぶやく自分の声で、目が覚めた。気を失っていたらしい。
白が目を刺す。

いきなり闇から明るいところに連れてこられて、目がついていかず瞬きをする。うっ、しばしばする……ん？

ガバツと身を起こす。人、金、白、青、緑……目に飛び込んでくるのはありえない色、光景。

「ここ、どこ？」

「勇者様！」

意味が分からない。

白い石畳の、神殿のような所。広さは二十畳くらい？人が多くてよく分からない。そう、人がたくさんいる。十五人くらいかな。しかもなぜか全員外国人だ。顔立ちからするとイタリアとか、そのあたりだろう。ところで金髪、銀髪、茶髪以外に水色とピンクがいるんですけどどうしたこと？染めてるの？染めてるにしては自然な色なんです。あとオッドアイ？ってやつの人が二三人いるんですが。服装が時代遅れもいいとこって言うか、絵画とかでしか見たことな

いような服ばかりなんです。その人たちが私をガン見してるんですが。はつきりいつてめっちゃめっちゃ怖い。いったいどういことなの？

あ、そうか。

「夢か」

「え？」

目の前に座っている小さな少年が何かつぶやくが、聞こえない。「瑞希が変なことばかり私に教えるから、こんな変な夢をみたのね」

ということとは……もっかい寝れば次目覚めたときは現実かなあ？夢の中で寝るつても変な話だけど。

「ミズキ？夢？えっと、あの……」

「とりあえず寝よう」

隣にあったトランクを引き寄せて頭を乗つける。ごっごつする。寝づらい。リアルな夢だなあ。どうせならふかふかの布団の上で寝たいよ。

「ね、寝ないで下さい勇者様！！お願いします！私たちを助けてください！！！！」

耳元で叫ばないでくれますかボク。寝れないでしょう。

「寝ないで下さいって言うてるんです！ほら、起きて！僕の話聞いてください！！」

ぐわんぐわんと肩を揺すられる。ちょ、見た目以上に力強い……！

「ちよっと、きついからやめて……」

「話を聞いて下さるならやめます！」

卑怯な……！

しかしこのままじゃあどうしようもない。私はしぶしぶながら体を起こして、その場に座った。少年も揺するのをやめてくれた。それでもちよっと頭のぐらぐらは残った。

うっ、さっさと聞いてさっさと寝よう。

「で、話つて？」

「あ、はい！勇者様に、私たちを救ってほしいんです！」
まさかの電波さんですか。

「人違いです。私はゆうしゃなんて名前ではありません。初めてあった人を助ける義理ありません」

とりあえず早口でそうまくし立てる。こういう相手には、とりあえず自分の意思をしつかりと伝えておくことが肝心だ。実体験に基づく確信。まあ、なぜか無視されることも多いのだけど……「ツンデレはいいから」とか「紗那の気持ちは分かってるよ」とか、意味不明な言葉で押し切られるのはどうしてだろう。私の人権はどこに？少年は目をぱちくりさせた後、首を傾げる。かわいらしいのに背筋が寒いのはどうしてかな？

「いえ、あなたは勇者様です。この召喚陣によって呼び出されるのは”勇者”となれる人物だけですから」

ああ、曇りのない目。そして私が勇者じゃない、と言った部分にしか反応しないのか。後半は無視ですか。そして召喚陣って、それは私が座り込んでいる青い線で書かれたよく分からない模様の羅列のことでしょうか。

聞きたいことが多すぎて、何から聞いたらいいのか分からない。しかしコレだけは譲れない。

「だから、ゆうしゃじゃありません。私は結崎^{ゆうさき}です」

「え？ああ、ユーザ様と仰るのですね。

申し遅れました。私はリン・トマ・ツヴァルでございます。此度は突然御呼び立てしたこと御容赦下さい。勇者様」

膝立ちで両手を胸の前で組み、頭を下げ、かなり丁寧な口調でそう述べたマツバ君（仮）。

ゆうしゃは否定してくれないのかい。ってか……ゆうしゃって、やっぱり勇者か？瑞樹が常日頃話題に出してくるRPGとかラノベとかでよく出てくる単語の、あの勇者なのか？

「実は今、私たちの国は滅亡の危機に瀕しております。魔王と呼ばれる者が収める西の国から侵略を受けようとしているのです。

相手の力は強大であり、我々だけの力では到底太刀打ちできません。

そこで、勇者様にはその素晴らしい御力によって我が国を救っていただきたいのでしゅ」

あ、囁んだ。

マツバ君の耳が真っ赤になってふるふる震えている。周りの人間も一部、肩を震わせている。あ、一人後ろ向いてる。

ちよつと絆されそうだ。

「あのう」

「はい！引き受けていただけますか勇者様！！」

ぐ。キラキラとした目を向けやがって……負けるな私！

「私にはそんな大層な力はありませんので無理です。喧嘩が強いわけでも超能力があるわけでも悪知恵が働くわけでもなく、ごくごく普通の女子高生ですのう」

そういうのは兄とか瑞樹とかフジツボとか理子とかに任せてほしい。きつとどんな相手でもどうにかしてしまっから。

「大丈夫です。勇者様が気づかれないだけで、勇者様には素晴らしいお力があります！僕たちを救って下さい！お願いします！！」

ああ、もう、まったく。

どうして私の周りは人の話を聞かない連中ばかりなんだろうね？

いや、人違いですから！（後書き）

マツバ君登場。シヨタ好きにはたまらない感じです。

何でマツバなのか。彼の名前を一息に口に出してみると分かってもらえと思います。

夢と現実

「とにかく、占者に見させましょう。そうすれば勇者様のお力もはつきり致しますので」

「私に特別な力はありません」「いえ、あります」

というやり取りを数回繰り返した後、近くにいた女性がそう言った。詳しく聞くと、占いによってその人物の潜在能力を見ることが出来るらしい。へー。

自分の潜在能力なんて、ツツコミくらいしか思いつかないけれど。後は……ちよつと、ほんのちよつと異常事態に慣れてるかなーってところかな。勇者や主人公らしい「超幸運体質」とか「身体能力ものすごい」とか「ハーレム体質」とかはない。自信を持って言える。あつてたまるか。

髪の毛一本渡せば、後は一晩かけて占えるそうなので、一本抜いて渡す。ちよつと痛かった。夢のくせに痛いとは……女性が丁寧に髪の毛を白い布に包む。んな大層なもんじゃないよ。あなたのピンクの髪の毛がよっぽど綺麗だしさらさらだしつやつやだし。

そういう問題じゃないことは分かってるけど、こつ、気持ち的に。

とにかく一日経たなければどうにもならないらしいので、部屋に案内された。連れてきてしまったトランクをとりあえず持つていこうとすると、近くにいた茶髪の男の人が無言で、有無を言わずトランクを持って先へ歩き始めた。え、あの……

「お部屋までお運びいたします」

………はい。分かりました。

こつという人は、何言っても無駄だ。持つていってもらえるなら甘えておこつ。うん。

部屋から出て行くときに、全員の視線が集まってきて凄く怖かった。

歩いていく間、周りを見わたすと、かなり立派な建物のようにだった。白の石……大理石、だろうか。床も壁も石で組まれ、ところどころ金で模様が書かれている。神殿であるのは間違いないさそうだ。よくよく見れば、壁にある金の模様と周りの人たちが着ている服に金糸で刺繍されている模様は同じで、何かの文字のようだった。窓は天井高くに備え付けられており、今は昼間のようで、光が壁に反射して眩しいくらいだ。それでも裸足に床は冷たかった。こつこつという音の間にぺたぺたと変な音が混じる。

「こちらでございます」

しばらく歩いた後、目の前のマツバ君が立ち止まった。そして飴色のどつしりした扉をゆつくりと開いていく。ギイッと軋む音がして、部屋の中の様子が見える。

広い。

紺色のカーペット。扉と同じ飴色の机、筆筒、テーブル、椅子。白い天蓋つきの、大きなベッド。窓には飴色の木枠にガラスが嵌め込まれている。十畳以上はある。シンプルながら、非常に造りのいい部屋だ。高いだろうなあ。まあいいか。夢だし。

私が部屋に入ると、トランクを持った男の人が入り口近くの壁にトランクを立てかける。そしてすぐに出て行く。無言でしかも静かだ。大きくて存在感があるはずなのに。気づいたら傍にいるような変な人だ。

「勇者様におかれましては、お疲れのようですのでごゆっくりお寛ぎ下さい。御用の際には机の上のベルを御鳴らし下さい。使いのものがすぐに参りますので」

ピンク髪の女性が丁寧な頭を下げる。そして私は部屋に一人取り残された。

よし、寝よう。

さっさと寝てこんな変な夢とはおさらばしよう。

ふかふかのカーペットが心地よかった。さらにベッドはカーペット以上にものすごくふかふかで、柔らかすぎて逆に寝れなさそうな気もしたが、潜り込んでみると滑らかさと暖かさにすぐに眠気が襲ってきた。コレはくせになりそうだ。おやすみなさい。さようなら。そして私は眠る。ずっと渦巻いてた妙な不安に、気づかないふりをして。

『どう……彼女……』

『しかし……だというのに……』

なじみのない声が、どこか遠くから響いた。

何人かが、切羽詰った感じで何か話している。

『……ですが、一体……』

『なれば、……ということに』

体から意識だけがどこかに飛んでしまったようだ。どうしてそう思ったのだろう。そんな経験生まれてから一度もないはずなのに。

ふわりふわりと、現実味のない浮遊感が気持ちよかった。

『だけど、彼女は……』

『問題は……するかということだ』

ふわり、ふわり。

意識が近づく。声が遠ざかる。ゆるゆるとした目覚めが近づいて

くる。

『彼……聞いて……』

……私は、どこにいたんだろう。

……私は、そこにいたんだろうか。

……よく分からない夢を見た気がする。

部屋の中なのに穴に落ちて、ありえない髪色の人たちに囲まれて、勇者だの何だの言われる。瑞樹が好みそうなシチュエーションの、夢。

よっぽど疲れていたんだろうな。そうでなければ、そんな変な夢を見るはずがない。そもそもあまり夢を見るほうではないのに。寝る前の記憶もないし。

そういえば昨日瑞樹が勇者だの異世界だのいつていた気がする（昨日というか毎日ではあるけど）。それに影響されたんだろうか。私も流されやすいなあ……

目を閉じたまま、ため息をつきながら、起きるか二度寝するか考える。いつもの布団よりもやわらかく暖かい気がする。起きるのがもったいな……

ぱちりと目を開ける。

飴色の天井。垂れ下がる白の布。見覚えのない、部屋。

思わず飛び起きて周りを見渡す。白。青。金。知らない色。そして堅固そうな扉の隣に無造作に置かれた、見覚えのある赤……トラंक。

あれ、何があったっけ……えっと、いつもどおり学校にいつて、いつもどおりいろんな話をして、家に帰って着替えてアリスを堪能してテレビを見て、夕ご飯はとんかつで兄が変なこと言ったからお

母さんが帰ってくる前に旅行の準備をして、終わったところに兄が来てとんかつは三個で何か光ったと思ったら穴に落ちて……いや、それは夢で。夢の中で目が覚めると変な人に囲まれて勇者だとか救えとか変なことを言われて、そんな力ないって言ってもマツバ君は信じなくて髪の毛を渡してトランクは運んでもらってこの豪華すぎる部屋に案内されて人生初の天蓋ベッドとかで寝て……寝れば、夢から覚めると、思ってた。

「はは……」

乾いた笑いが漏れる。

夢から、覚める。

ああ、私は何てバカな思い違いをしてたんだろう。

……夢の中で寝て、夢から目覚めることなど、できるはずがなかったんだ。

夢と現実（後書き）

短いのですが、切りどころが……（汗）
しかし3話にしてようやく現実と認める主人公ってどうなの？おか
げで話が全然進みません（´、A；）

次では、この世界について触れていこうと思います。

天文学的確率

呆然としていたのは、十分にも満たなかったと思う。

よくよく考えれば、リアルすぎるその感触に、眠る前から私はこれが夢であると信じきれなくなっていたのだから。

いつ覚めるかなんて分からない、夢かどうか分からない。ここがどこなのかさえ、分からない。

絶望的な気さえするこの状況が、現実感を奪っていた。

とにかく、現状を把握しなくては何も分からない。私は意を決すると、寝る前の説明を思い出し、机の上の銀色に光る呼び鈴を手に取り、軽く振った。鈴のような音がすると思っていたのに、何の音もしなかった。首を傾げてもう一度振ろうとすると、ドアがノックされた。

「御用でしょうか、勇者様」

「あ、あのー……とりあえず、中に入ってもらっていいですか」

何て言ったらいいかわからず、言葉を濁してしまう。でも相手は気にした風でもなく「失礼致します」とドアを開けて入ってきてくれた。

「それで、どのような御用でしょう」

美人だった。

ポニーテールにされたマツバ君と同じクリームのような淡い金髪、エメラルドのような青緑の目、小作りな顔に桜色の唇。身長は百五十五、というところだろうか。すらっとした体を包むのは、昨日も見た白に、こちらは朱色の刺繍が入った簡素なドレスだった。

三日月のような人だ。こんな美人は見たことがない。理子は路線が別だから……傾国の美女、っていうのはこういう人のことを言うのかも知れない。同性でも見とれてしまう。異性なら十人中十人が好意を抱くだろう。こんな人がいるんだなあ……

「あのう、勇者様？」

美人さんがちよつと困った顔をする。それも綺麗って……すごいなあ。ただただ感心するしかない……ってそうじゃない！しつかりしろ自分！！

「あ、ご、ごめんなさい。えっと、その……私は、結崎っていうんですけど、その……いくつか、教えていただきたいことがあって……」

一体どう切り出せばいいのか、よく分からなかった。

「この世界について、ですね」

「は、はい！その、いまいち自分の状況がつかめていない状態です……」

ああ、こんなことなら昨日マツバ君に色々聞いておくんだった。後の祭りだけど……昨日は目覚めることしか考えてなかったからなあ……

美人さんはくすりと笑うと、「それでは朝食を用意させましょう」といって、小さく何かつぶやいて、指を鳴らした。ご飯食べながら色々話してくれるらしい。食べさせてもらえるなら食べさせてもらおう。さすがに毒が入ってたりは……しない、よね。私にだけ毒になったりとか、ありえなくはないよね……いや、考えすぎだ。考えてたら動けなくなる。それに一応耐性あるほうだし……

とりあえずご飯がくるまでに基本的な自己紹介を済ませました。リクリア・トマ・ツヴァル。マツバ君のお姉さんだそうです。道理で似てるわけだよ。マツバ君もおっきくなったらものすごい美青年になるんだろうな……

リアさんが勇者付の侍女？らしい。私は勇者じゃないって言うてみたけど、「何を言ってるのこの人は勇者じゃないわけがないでしょう」という何の疑いもない純粋な目を向けられた。だめだこりゃ。あの占いに期待しよう。

とりあえずその勇者とやらについて質問しようとしたところで、

ドアがノックされた。私が何か言う前にリアさんが動いて、ドアを開ける。流れるような静かな動きだった。

「失礼致します」

入ってきたのは、茶色の髪を結い上げた、薄水色に赤の刺繍が入った、リアさんと同じ形のドレスを身にまとった女性だった。どうも制服らしい。色の違いが階級の違いを表しているのだろうか？こちらにも美人だったけど、リアさんを見た後だからか美人過ぎなくてちよっとほっとする。それでももちろん私よりは美人なただけ。

しかしえらく早かったなあ。あの指を鳴らしたのが合図だったにしては、用意してたのを持ってきただけのよう……ちよっと朝食の時間だったとか？

一緒に入ってきたワゴンには、パンとスープと果物が載っていた。一人分。

……リアさんはもう食べたんだってことにしよう。

おいしい。

私の心配もなんのその。朝食は普通においしかった。しいて言えばちよっと塩分が足りないかもしれない。まあ味付けの好みの範囲だから問題ない。

その間にリアさんが色々教えてくれた。テーブルに椅子が二つあるのにリアさんが座らないので、座ってもらうまでにちよっとひと悶着あったけど省略。ちゃんと座ってくれたし。

で、どうにもここは異世界とかパラレルワールドとかいうところらしい。この時点ですでに頭が痛い。一応覚悟はしてたけど。

イエ・ミエ・ソーンエヴァ、という神様がいらっしゃるらしい。その神様は、何も知らなかった人類を導き、魔王という存在に壊滅させられそうだった人類を救うため、勇者を呼び出したそうだ。勇者によって魔王は封印され、世界に平和が戻った。しかし魔王は封印しただけで、またいつその封印が解けるとも分らない。というわけで、そのときのために国を作り、勇者を呼び出す方法を授けたそうだ。ミソとか言う神様のせいで私が心労を抱えているらしいとわかり、叫びだしたくなったのをぐっところえて続きを聞くと、魔王は60〜80年に一度封印を破り復活するのだそうだ。その度に勇者として相応しいものを呼び出して退治してもらってるらしい。聞くと、過去に5回例があるらしい。多いんだか少ないんだか。しかし……

私、運、悪すぎじゃない？

何だってそんな少ない確率に巻き込まれてるの私。地球から勇者を選出してるとして、60億だよ？60〜80年ってことは大体人の一生だから、ちょうど60億人から一人を選出してるってことだよ？何でその一人になっちゃってるの???

選ばれるべきな人間は回りに溢れてるのに……瑞樹とか、きつと嬉々として勇者になって魔王の元に行くよ。理子ならきつと周りの人間をうまいこと使って倒させるよ。フジツボならきつといらん正義感に燃えるか美人なお姫様に頼まれて気合入れて無駄に体鍛えまくってどうしてか倒しちゃうよ。お母さんならきつと魔王と円満和解して平和的解決に持ち込むよ。兄ならきつと魔王城にどうやってか侵入して魔王生け捕りにしちゃうよ。なのに何で……

コンコン

「失礼致します」

本日三回目のその言葉と共に入ってきたのは、最初にこの部屋に案内してくれたメンバー。マツバ君、ピンク髪の女の人。いかつい男の人の変わりに、帯剣した男の人が二人。

マツバ君の浮かない顔を見て、確信した。

ああ、厄介ごとが笑顔で手を振って全速力で駆けてきたよ。

天文学的確率（後書き）

地球以外の世界も候補に上がっていると、さらに確率が低くなりますよね。 なんとというピンポイント。

次が本題……まさかの5話。

もっと一話を長くしてもいいんだけど、切りやすいところで切ってたらこんなことに……orz

もっと計画的に進めましょう。 自分

神の加護って便利な言葉だよ。ね。（前書き）

遅くなりました。ごめんなさい（汗）

説明回です。説明って苦手です。非常に読みづらいことになってます。

多分、飛ばしてもらってもかまわない気がします。

神の加護って便利な言葉だね。

まあ、そうだろうな。

私としては、それくらいの感想しか抱けなかった。

マツバ君たちが持つてきたのは、私にとってはそんな驚くことではなく、私以外の人たちにとっては驚きのあまりドッキリカメラを探して回るような、冗談でしかない事実だった。

「ユーザキ様の能力を調べさせていただきましたところ……その、私としても信じがたく、大変申し上げにくいのですが……戦う力は一般兵ほど、魔力は三級魔法兵ほど。その他特殊能力等は確認できず……」

「そ、それはまことなのですか!？」

ピンク髪の『桜樹さくらぎの占者』と呼ばれるらしいクルーツェリ・シエクラ（フルーチェさんに決定）がそういうのを聞いて、リアさんが顔面蒼白になって叫んだ。蒼月みたいだ。美人は得だなあ。あまり羨ましくはないけど。

フルーチェさんは今にも掴みかかりそうなリアさんを見ることなく、ただ頭を下げて淡々と事実だけ述べていく。それでも、震える声は隠せていなかった。

「強いてあげるのならば、細工に才があると……しかしそれも、それを生業とするものたちよりはあれど、国選職人ほどには……」

マツバ君の顔もよく見ると青い。どころか泣き出しそうだ。後ろの兵士たちはただじっと立っている。視線はフルーチェさんを捕らえて離さない。

「けど、そんな筈は……」

「だから言っただじゃないですか」

あくまで認めようとしないうるリアさんではなく、ひたすら耐えるフルーチェさんに向かって、心の中では、泣き出しそうなマツバ君

に対して、私はこう言った。

「私は普通の女子高生だって」

多少キツイ物言いになってしまったのは、きっと呆れていたのだ。茶番のような状況に。

部屋の中の温度が、二・三度くらい低くなった感じがした。

沈黙が痛い。リアさんはその場に崩れ落ちて目を見開いている。

マツバ君はうつむいて、フルーチェさんは体を震わせている。兵士の人たちは、それでも顔を青くするだけで毅然と立っている。状況が状況じゃなかったら惚れそうだ。

しかし……ああ、もう。

「で、私はどうすればいいんですか？」

私の言葉に、一番最初に反応したのはマツバ君だった。

「せ、世界を救って欲しいと……」

「どうやって？」

「そ、それは……」

マツバ君の目が泳ぐ。見かねたのか、フルーチェさんが恐る恐るといった感じで口を開く。

「ユーザキ様におかれましては、私の力では図ることの出来ない御力が存在されている可能性が……」

「んなわけあるかい！」

私は奇人変人じゃない！

呆けていたリアさんが、ガバツと顔を上げて私を見る。

「ですが、勇者様でなければ世界を救うことは……」

ここまでくると笑うことすら出来やしない。

「いや、普通の女子高生に世界を救えとか無茶言わないで下さいよ。」

心の底からの本心だった。

大体、自分の世界のことでしょう。自分でやれ！と叫びたい。

けど確かこういうのは……なんだったかな。えっと、そう！勇者じゃないと使えない武器が合って、それじゃないと魔王を倒せないとか、そんな感じらしい。ものすごい能力はないってこともはつきりしたし。でもものすごい力だったって……結局同じ人なんだから誰かが倒せると思うんだよね。わざわざ呼び出すようなことか？

ぐるぐると考えながら唸る私を、フルーチェさんの声が現実に取り戻した。

「今しばらく、お時間を頂きましょう……ユーザ様にも、私たちにも、事態を把握する時間と今後について考える時間が必要です」
「私はさっさと返して欲しいんだけど……」

「……出来ません」

震える声が、ぼつりと漏らした。

マツバ君が、今にも倒れそうな顔で私を見ている。

「だって、それは……」

「リーン殿」

フルーチェさんが制するように名前を呼ぶ。何なんだろう。

そして、私に向かって厳かに告げる。このとき、一番冷静だったのはフルーチェさんだった。

「ユーザ様。大変申し訳ないのですが、今回の召喚の儀には非常に時間がかかります……用意だけで一月。実際に行うのに一週間。その他にも儀式をするによい日を待たねばなりませんし、儀式に必要な物の中には珍しく手に入れ難い物もあり……今すぐに、とはとてもいかぬのです。」

ですので、目途を立てるのに今しばらく時間を頂けませんか。」

今すぐは無理。実際の儀式には時間がかかる。何よりも私が勇者でないことをこの人たちが受け入れられない、か。

時間を置く。問題の先延ばしではあるが、それしかないかもしれない。どの道すぐに帰れないなら、仕方ないか……兄とかお母さんとか、心配するだろうなあ……というか、そこらへんどうなるんだ

ろうか。そういうのを聞くのにも、時間が必要かあ……

フルーチェさんは顔を上げて、私の目を見る。

「まずは十日。その後、答えを出させて頂きたいと思います」

私にもう、否をいう理由はなかった。

ぺらり。

「十日かー……長いなー」

ごろり。

どう扱ったらいいものか分からないけど、とりあえず客人として扱うことにしよう。私には侍女と呼ばれるお付の人が二人つくことになった。一人はリアさんで、もう一人がラズラウエル（ラジーと呼んで欲しいといわれた）さん。青みがかった灰色のセミロングに、ぱつちりとした赤紫の瞳。ロリ巨乳だ。かわいい。そして何処となく理子に通じるものを感じる気がする……男を手玉に取るの、得意そうだなあ……天然か意図的かは別として。

しかしここまで美人だと、女として負けたような気持ちを味わう必要もなくいい。理子も瑞樹も、割と美人でもてるのだ。私は興味はないのだけれど、二人への熱い視線とか繋ぎを取ってくれるよう頼まれたりとか日常的に行われると、さすがにちょっと虚しいものがある。そんなに美人じゃないことも、もてるタイプじゃないこ

とも分かってるし、もてたいわけでもないんだけど、時々無性に悲しくなる。その点、この二人ぐらいキラキラして華をバックに背負ってるようなタイプだと、もはや次元が違う感じで虚しさを感じる必要もないくらいで気楽でいいなあ。

で、現在。

勇者のための本とかいうものが存在するらしいということで、教師をつけましょうか？というフルーチェさんのお言葉を丁重にお断りして、その本を読んでいるところです。

さすがにいきなり知らない人と一対一はごめんこうむるワケで。いや、異世界だってんだから知り合いなんていないに等しいんだけどさあ……まだマツバ君とかフルーチェさんとかの方がマシ。それに正直本当のこと教えてもらえとは限らないし。「魔王は悪で最低で、人々がものすごく困って魔王を倒さないとどうしようもなく、今までたくさんの方が魔王を倒そうと立ち上がったけどだめだったから勇者を呼んでそれがあなただから魔王退治よろしく」とか言われそう。その光景がありありと目に浮かぶのは何でだろう……

暗くなりかける気持ちを無視して、ページをめくる。

初めて魔王が現れたのは、500年前。

その頃は、今のようには世界が五分されるのではなく、小さな国がたくさんあったらしい。その小さな国同士で小競り合いが続いていた。

ところが、魔族が現れた。

魔族は一体ごとが強靱で、人が束になっても勝てない。剣で切っても槍で突いても意味がない。特別な加工を施したものだとか効くらしい。幽霊とか悪魔とかに似てるみたいだ。

魔法は効くが、魔族のほうが基本的な魔法の力が強く、倒すのはよほど強い魔法を使う人間でない限り大変らしい。

それでも魔族だけなら、まだ人は退治できた。

ところが、「魔王」が現れて勢力は一転した。

魔族が今までよりも強くなり、一体ごとで行動していたはずが徒党を組むようになり、人がどんどん追い込まれていった。

そしてもう駄目だ、と人々の中に絶望が浮かぶ頃、神様が現れた。神様は魔族たちをあつという間に追い返し、神獣を呼び出し魔法を唱え、「魔王」を封印してしまった。神であつても「魔王」を倒すことは出来ず、封印するしかなかったそうだ。その封印も70年ほどしかもたず、その度に封印を施さなければならない。ところがその度に神が訪れることは叶わない。

そこで、神は人に「召喚の儀」の方法を授けた。

これは「魔王」に対抗できる「勇者」を呼び出すための儀式と魔方陣であり、「魔王」の封印が破られた際には、これを使用し「勇者」を呼び出し、「魔王」を封印させるようにとのことであつた。

それから1000年経ち、とうとう「魔王」の封印が破られた。先祖たちは神の教えどおり「召喚の儀」を行い、「勇者」が現れた。

「勇者」は、剣を取り人々の先頭に立ち、「魔王」の所へ進軍し、見事勝利を収めた。「魔王」は封印され、再びこの地に平和が訪れた。そして、「勇者」の召喚は今も行われている。

大まかな歴史の流れは以上らしい。

続きには、「勇者」の存在の特異性について書いてあつた。

「勇者」とはこの世界の人間とは一線を隔す存在らしい。

身体能力や魔法力が常人の倍以上あり、いわゆる一騎当千、英雄クラスの力をみな例外なく持っている。それ以外に、それぞれの「勇者」によって一つ、この世界の人間の誰よりも上の力を何かしら持っている。それは、剣の才能であつたり、魔法の力であつたり、カリスマ性であつたり、ものづくりの才能であつたりするらしい。

神様によって与えられる力だと考えられているが、詳しいことは分かっていないらしい。

とにかくその力を使って「魔王」を倒してもらおう。「魔王」が倒されれば、「勇者」は元の世界へ還ることができる。

ちなみに、最後のほうに補足的に、何でこの世界の文字が読めたり話を通じたりするのが書いてあった。この本はミミズののたかったような文字で書かれていたが、私は読むことが出来た。どの文字がどうかは分からないけど、その文字を見ると意味が頭に浮かぶ、というような、変な感覚で、何でかなと思っていただけ、どうやらそれも召喚の影響らしい。これも神様の加護だそうです。神の加護って言っとけば済むと思ってんじゃないだろうな。

……しかし、気になるな……後で召喚についての詳しい本がないか聞いてみよう。自分の状況がどうなってるのかくらい知っておきたい。ひょっとしたら帰る方法も分かるかもしれないし。そんなものを見せてもらえないかもしれないけど。

ちよつと読むのに疲れて、本から顔を上げる。首と肩を回すと凄いい音がした。うわあ。

知らない文字なのに頭に意味が浮かぶ、というのがどうにもキツイ。英文を訳していくような、日本語が違う言語になったような、英語を無理やり理解させられてるような……うまくいえないけど、そんな感じ。

腰を上げて体を伸ばす。うあー、腰がちよつと痛い。根を詰めすぎたかもしれない。

しばらくストレッチをしていると、ノックが三回。ラジーさんが昼食を運んでくれた。鶏肉っぽいお肉の燻製とサラダとドレッシング。丸くて表面がちよつと硬いパンに玉ねぎのような力ボチャ

のようなスープ。ミカンのような形でりんご味の果物。相変わらず薄味だけど、美味しかった。ついでに召喚の本について聞いてみる。一応聞いておいてみてくれるらしい。でも、反応からしてあんまり期待は出来ないかもしれない。まあ、しょうがないか。

「ご飯も終わつたし、気分転換も出来たので、本の続きを読むことにする。」

最後に残ったのは、この国について。一番大事だと思うんだけどなあ……

魔法が発達している国。魔法を扱うには才能が必要で、ちょっとした火や水を出せたりするものから森を焼いたり津波を起こしたりと災害レベルの現象を起こせるものまでピンキリらしい。尤も、災害レベルとなると、時代に一人いるかどうかくらいらしいが。ポンポンいられても困るしね。

魔法は戦闘に主に使われるのかといえばそうでもなく、強力な魔法を使えるものは魔法兵として軍に入るが、そうでないものは、火種の代わりやちょっとした飲み水として使われる。そのため、割と生活に密着している。ただ、使えない人もそこそこいるので、火打石や井戸が使用されている。マッチとかはないのか。それは面倒だなあ……あ、でも生活するわけでもないし、一応魔法の才能はあるらしいし、まあ、大丈夫かな……うん。

ちなみに魔法とは、なんかそこら辺に漂ってる魔法の要素を集めて形にする力らしい。

それを集める力が強ければ強い魔法が使える、集める力がない人は魔法が使えない。酸素とか窒素とかを大気中から集めることが出来るような力、ってことなのかな。

で、その集めたものを水とか火とかにする。ここら辺はもうイメ

ージするしかないようだ。私も出来るのかな……ちょっとやってみようかとも思っただけど、もし魔法とか使えたら普通じゃないからやめておいた。

この国は王制ということで、貴族とか呼ばれる関係の人たちもいるようだ。小国を吸収し合併しながら大きくなってきたことから、いくつかの領地の自治をそれぞれの領主に任せており、その領主が貴族と呼ばれる特権階級らしい。そこらへんは昔のヨーロッパあたりと一緒なワケね。結局、人がいればやることは同じ、ってことかな。魔法があるってとこ以外、特に大きな違いはなさそうな感じだ。これなら、まあ十日くらいどうにかなるかもしれない。

あー、でも。貴族とかそういう人と会ったことないし……礼儀作法とかそういうの、よく知らないし。会うことあるとまずいのかもしれないな。そのところも聞いてみよう。ついでに必要なならそこらへんも教えてもらおう。

宗教は、あのミソとかいう神様を信仰する「ソーン教」というやつらしい。500年前の神様の戦いとかお話とかを元に、聖典が書かれ、ソーン教本部には実際に神様が使っていたと言われている品物が収められているらしい。なんと胡散臭い。

宗教の教えとしては、信仰すれば、神の加護があったり死後に救われたりするらしい。書いてないけど、多分お金を払えば払うほど救われたりするんだろうなあ……うん。

大体読み終わると、結構な時間が経っていたようで、窓の外はだいぶ薄暗くなっていた。

読みながら取っていたメモもそこその量になっている。もっかい伸びをする。体ががちがちだ。

でもとりあえず最低限のことは分かった。明日は図書館にでも案内してもらおうかな。図書館を使わせてもらえるのかどうかは謎だけど。

しかし、本当にどうして文字が読めるんだろう。神の加護、ねえ

……

神の加護って便利な言葉だね。（後書き）

一応書いておかないとなーということでのこの世界についての大体。でも説明回は嫌いです。今回つまらないことかと思えます。ごめんなさい。文才のなさがここにきて一気に表に出てきたよう……

次からはもっとテンポよく行きたいと思います。あと出来るだけ早く。

着飾るのはわりと苦手です。（前書き）

しばらく間が空いてしまつてすみません……（汗）

ちよつとリアルで色々ごたごたしてまして……あと単に筆が進まなかつた……（滝汗）

お気に入りとか評価とかありがとうございます。非常に嬉しかったです

着飾るのはわりと苦手です。

寝ぼけ眼で見る天井は、やはり知らないものだった。正確には、見慣れないもの。

飴色の天井に、やけにふかふかする背中。体を包む柔らかく暖かな毛布。……当たり前だけど、まだ慣れない。慣れたくないけどさつさと慣れたい……起き抜けに安心できないのは辛いなあ……

しばらくもぞもぞやって、結局起きる。うー、眠い。何時だろう。腕時計は持ってこなかったからなあ……多分朝の七時くらいだと思うんだけど、何せ時計がないから分からない。時計そのものがないのか、この部屋に置いてないだけなのか分からないけど、ちよつと不便。時計を見て生活することに慣れきった現代人ですよこちとら。

しばらくして頭がだんだん覚醒してくる。

名残惜しいベットから何とか降りて、大きく伸びをする。背中が鳴った気がする。ちよつとストレッチでもしようかなー。ということとでカーペットに寝そべる。足を開いて体を倒す。うあ、痛い。筋が無理やり伸ばされてるのが超痛い。でもこれが気持ちいいんだよ……決してMではない。断じて違う。ちがうったらちがう！……誰に言い訳してるんだろうね？

「どうしようかなー……」

どうしたらいいのか分からないことが多すぎて、どうしようもない。問題が山積みすぎる。問題じゃない状況と言ったら、意外と自分が落ち着いてることと、周りの人がまだ友好的なこと。後は尊厳的な生活をできてることだろうか……ううん。最悪じゃないけどよくない状況ってところかあ。

ヨガで言うところのハトのポーズを取る。全身が伸びて気持ちいい。でもこんなところ見られたら変人扱いだろうなあ……

カチャリ。

「ユーザキ様、おはようございます……？」

小さな声が、戸惑いで止まった。

状況を整理しよう。

私　ハトのポーズ（知らない人から見ると単なる変なポーズ）。それを見てしまったラジーさん（私を起こしに来ただけの何も知らないメイドさん）。ノックしなかったのは、寝てると思ったからだろうなあ……と現実逃避を試みる。

「……し、失礼しました」

そう言ってドアを閉めようとするラジーさん。

「ちょっと待ってください……！」

このままじゃ変人扱いだ！と理解した私は必死にラジーさんを引き止めた。普通じゃないと思われるのは心外だ。私は普通なんだから。

体をほぐすための運動だと必死で説明して、どうにか納得してもらえたらしい。ラジーさんは不審な顔を引っ込めて朝ごはんについて聞いてきた。もう食べますか？とのことなので用意していただくことにした。

今日のご飯は昨日と大体一緒に、スープがミネストローネ（ただし色は黄緑。食べるのをためらったのは言うまでもない）で、果物はバナナ味の柿だった。ここの基準では豪華なのか、普通なのか。

質素、ということはなさそうだけど、分からない。相変わらずの薄味だし。

「今日は、昼食を陛下と取っていただきます。それまで部屋でお待ち下さい。昨日仰られていた召喚についてこの国についての詳細な本については、一先ず司書が選んだものをお持ちいたしますのでそちらをお読み下さい。図書室への入室許可は、陛下に許可を頂くのがよろしいかと……」

「陛下って、どんな方？」

気難しい人とかプライド高い人とか権力に慢心してる人とか、お近づきになりたくないんですけど。相手にされないか絶対面倒なことになるから。

そう思っていると、ラジーさんは綺麗な笑顔でこう言った。

「とても素晴らしい方ですわ。あの方がこの国を支えてくださっているのです。この国が戦争もなく、平和に豊かな生活が出来ているのも、陛下が素晴らしい政策をして下さっているからですのよ」

一片の曇りもない笑顔が、やけに眩しくて。

でも私は、それをすんなりと信じた。この人にこれだけ信用されている人なら、きつと凄い人なんだろうな、と。

そうじゃない可能性を考えることをやめてしまった。

お昼は、結構早くきた。本を読んでいたからかもしれない。二冊目に入ってしばらくして、ラジーさんに「そろそろ準備を始めましょう」と声を掛けられた。

準備って……と戸惑う私の前に、侍女さんがずらり。うん？

戸惑う私を尻目に、侍女さんたちはテキパキと仕事を進めていく。気づいたら服を剥かれてお風呂でピカピカに体中を磨かれていた。恥ずかしがる暇も抵抗する暇もなかったよ……

五人くらいによつてたかつて磨かれたせい、あつという間に全身綺麗になった。羞恥やら何やらでぐったりする私を尻目に、風呂から連れ出されて全身を拭かれると、すぐに浴衣のようなものを着せられてから爪を磨かれ肌にクリームを塗られ髪にオイルを塗りこめられ……母に連れて行かれたエステでもここまでじゃなかったてくらい至れり尽くせりな状況が続けられていく。それなのに疲れがたまつていくのはなんでだろう。肉体的には癒されてるはずなのに、精神的にグツタリだよ。着替えくらいはしなきゃなあ、くらいの気持ちだったもんで。

そんなに時間ないならもっと早くから始めてくれれば……ああ、皆忙しいのか。というかここまでやる必要あるの？相手が王様って言っても、昼食だけでしょ？

そんな文句を口からだす勇氣も元氣もなく、もうなるようになれと流れに身を任せた。

私が着せられたのは、リアさんやラジーさんが着ている服とマツバ君が着ていた服を足して二で割ったような、ドレスと狩衣かりぎぬを組み合わせたような不思議な形の衣装だった。淡い水色のシャツの上に

白のレース付き狩衣（？）を羽織り、下は緩いマーメイドラインの、パニエもバスルもないシンプルな白のロングスカート。スカートを膨らませた人を今の所見てないから、そういう文化がないのかもしれない。

狩衣の裾にもスカートの裾にも茶色のぺたんこな革靴にも、金糸で細かく刺繍が施されている。その刺繍は、リアさんやラジーさんが着ているドレスにもある、文字のようなく分らない形だ。この国の文字に似ている気がするけど、読めない。

あちらこちらに金と水色の飾り紐やらレースやらがさりげなく飾り付けられていて、シンプルだけど味気ないことのない、非常に品がいい感じの物となっている。

残念なことに私だと服に着られてしまってるんだろっなあ……近くに鏡がないから自分の姿を見れず、慣れない化粧を施された我が身がどうなってるのか全然分からない。人並みでしかない自分の顔を考えれば、まあまし程度にはなってると思った……いいや。もうどうなっても知らん。私にはどうしようもないし。鏡も見ないでおこう。下手に落ち込みたくない。

髪のかき上げまで終わると、リアさんから軽い注意事項を告げられた。

「陛下は優しいお方ですので、そう畏まったりされずとも大丈夫です。ゆっくり御昼食をお楽しみ下さい。陛下にお願いをされるなら、御食事が一息ついたころがよろしいでしょう。陛下から何事かお尋ねになられるかもしれませんが、どうぞ思う所をそのまま御話し下さい。ユーザキ様の本当のお考えをこそ私たちは教えて頂きたいと思っていますから」

ようするに、適度に敬意を払いつつ、嘘を吐くなど。

身も蓋もない要約を忘れないようにしながら、どういつことを聞

かれるんだろうと意味のない推測を始めた私を、リアさんが先頭に立って昼食会の会場へと案内してくれた。

そしてとうとう、油断の出来ない昼食会が始まる。

着飾るのはわりと苦手です。（後書き）

6話目でやっとここまで進んだ……陛下と会わせるの、3、4話目くらいで済んでるはずだったんだけどな……（汗）

とにかく、お城から出るまでがプロローグ的なものになる予定なのでそこまでさっさか進めます……キングクリムゾンやるべきかしら。あれもこれもとか考えてたら全然お城からでれません（泣）

おいしいけどもっとリラックスして食べたい。(前書き)

……すみませんでした。

がんばります。

おいしいけどもっとリラックスして食べたい。

若い……かな？

それが、第一印象だった。

「ようこそ異界の者よ。余はイルシエーメ・アヴェエ・ユクス・トリスティア。トリスティア国第20代国王である。此度は突然の召喚により不自由をさせたこと、申し訳なく思う」

堂々とした、力強い言葉だった。なるほど、この人が王様なんだな、と相對するものに納得させる力がある。いわゆるカリスマってやつだろうか。深い青の上着がそれを増している気がする。

「私からも謝罪を。突然の御呼び立て申し訳ありません。私はアリストテル・ユール・トリスティア。当国の王妃ですわ。よろしくお願いいたしますね」

こちらは儂げな美人だ。この人が王妃様……お姫様、といった方が雰囲気には近い気がする。アベさん（陛下）の薄青よりも更に透明な色。アベさんが冬の空ならテルさん（王妃様）は凍った川のような髪の色をしている。その色が、儂さに拍車をかけているのかもしれない。おっとりとした顔が、わずかに緊張で歪んでいた。おそろいの深い青のドレスが印象的だ。

「お初にお目にかかります。私は結崎紗那と申します。ええと、その……可能な限り早く送り返していただけたら、それで結構です」

オブラートに包もうと思っても包みきれず、本音が駄々漏れになっ
てしまった。いやー、まあしかたないよね？諦めたはずだったけ
ど意外と不満が溜まってたみたいだし。ワタシワルクナイ。

私の言葉にアベさんが「努力しよう」と政治家のような答えを返
したところで、席に案内される。こうして、三人の食事が始まっ
た。

食事はまずまず平和な始まりだった。見た目と味がそぐわない
ことは多いけど、味はどれもおいしい。さすがは王様の食事って感
じだ。……毎日こんなの食べてたら太りそうだけど。赤身魚のカル
パッチョにじゃがいも風味のスープ。ローストビーフ（牛じゃない
かもしれないから、ローストミート？）にナッツの入ったドイツパ
ン。肉汁さいこー。クルトンうまい。パンかてー。そんな感じ。で
もやっぱりちよいと塩気が足りない。ひよっとしたらあんまり塩が
取れない国なのかも。

食べている間は、アベさんがこの国の特産品がクルージュ（スー
プの材料らしい）だとか口に合うかとか不自由させて申し訳ないと
か当たり障りのないことを話していた。テルさんはそれに時々微笑
んで相槌をうっていた。私はクルージュおいしいですねとか大丈夫
ですとかいえまあいいですとか当たり障りのない言葉を返した。

そしてイチゴ的な味のフルーツがはさまれたクレープと紅茶的な
飲み物が出されたとき、とうとう本題が出てきた。

「ところでユウザキ殿は向うではどのような生活を？」

一瞬だけ、場が静まった。

すぐに元に戻ったけど、何が聞きたいのかはそれだけでうかがい
知ることができた。ようするに見極めたいのだ。使えるのか使えな

いのか。どうしたら言うことを聞かせられるのか。

とりあえず当たり障りのない答えをと思って、私はそんな意図にまるで気づいてない風を装って答えを返した。聞き流すのとか得意なんですよねこちら。

「そうですね……私の国では多くの人が18になるまで学生として過ごします。私も、毎日学校に行つて言葉や歴史を習っています」

「18まで？それはすごい。我が国では学校に行くものはあまり多くない。せめてもう少し敷居を低くしたいとは思っているのだが、なかなかうまくいかぬ」

「そうですね。私の世界でも、他の国では学校に通えない子が多くいます。私は恵まれているのでしょうね。普段は意識しませんが」

「当たり前のことを意識するのは難しい。ユウザキ殿が気にされることではあるまい」

「そういつていただけるとありがたいです」

「学校に行かれる以外は、どんなことをなさっているのですか？」

突然、テルさんが話を振ってきた。今までほとんどしゃべらなかったからちよつとびっくりした。こつちの世界の話に興味があるんだろうか。

「そうですね……友人やペットと遊んだり、旅行に出かけたり、物を作ったり、ですね。」

「物を作ることが好きなのかな？」

「ええ。木の板を掘って色々なものを作ります。といっても、素人の独学なので大したものは作れません」

「あの、ペットとはなんですか？」

テルさんが困り顔で聞いてきた。ひょっとしたらこっちはペットっていう概念がないんだろうか。

「家畜はいますよね？動物を、食べるためでなく、一緒にいるために飼育するんです」

「まあ。伯父が伝書鳩を我が子のようにかわいがってらっしゃるけど、似たようなものかしら？」

「ええ。それであっていると思います」

たぶん。役立てるために飼うわけじゃないからちよつと違う気もするけど。

テルさんは「まあ、そうですの……」と目を瞬かせた。しかし意外と話すなあ。最初の印象は静かに佇んでる人だったのに、今は好奇心旺盛な女の子だ。猫かぶってたのかもしれない。猫、いいなあ。ウサギの次に好きだなあ。にゃー。

癒しを求めて意識が逸れる。よく考えたらしばらくアリスと会えないんだよなあ……あれ？死亡フラグじゃない？私アリスなしで生きてられるのかな。かなり自信ない……

エクトプラズムを発しそうになった。ぎりぎりの所で踏みとどまれたのは、気を抜けない場面で緊張が一応続いていたからだ。危ない危ない。いきなり死ぬのはさすがに失礼だよな（そういう問題じゃないけど）。

その後もいくつか質問され答えを繰り返したけど、そんな精神状態だったから、どんな話をしたのか、どんな答えを返したのか、部屋に帰りついたときにはほとんど記憶がなかった。まあでも多分、当たり障りのない答えを返したんだろう。私のことだから。

部屋に戻って一人になって、ベッドに飛び込む。ふかふかでやわらかい。ほのかに暖かいのは、湯たんぽでも入ってるのかもしれない。あるいは魔法というやつなのか。

「結崎殿には魔法の才があるのですから、想像するだけでいいのですよ」

テルさんのそんな言葉が、頭を過ぎった。

さっきの食事会で言われたのだろう。ぼけっとしてた私はその言葉になんとなく誘われるように、右指を一本立てて、そこに何かが集まるイメージをする。

「火」

ポッ

こぶし大の大きさの赤い火が一瞬で立ち上った。

「あつつ！？」

驚きで身を起こすと、また一瞬で火はなくなってしまった。でも、今起こったことが夢ではない証拠に、私の前髪の一部が、ぷすぷす焦げ臭いにおいを発していた。

イメチェン、決定。

おいしいけどもっとリラックスして食べたい。（後書き）

ということで数ヶ月ぶりの投稿となりました。

卒論書いたり卒業したり就職したり引越したりいろいろありましたが元気です。これからも月1目指して頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7314m/>

非日常アリス

2011年5月17日06時17分発行